

---

# リリース

まどろむ黒猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリース

### 【Nコード】

N0300R

### 【作者名】

まどろむ黒猫

### 【あらすじ】

普通の人より悲惨な人生を送ってきた悠人<sup>ゆうと</sup>。

ある日学校帰りに奇妙な渦により異世界に召喚されてしまった。

「は？魔王を倒せ？ふざけんな！！元の世界に帰せ！！」  
貴族？階級？んなもん知るか！！

最強主人公が奴隷解放の為に好き放題しながらも、魔王を倒す旅に出るお話です。

## はじまり

最初に母さんが亡くなった。

原因は交通事故だった。

次に父さんが亡くなった。

父さんは母さんが居なくなってから駄目になった。

原因は薬物中毒だった。

最後に兄貴がいなくなった。

きっと、親の代わりに俺を育てることがわずらわしかったのだろう。

今は生きてるのか死んでるのかも分からない。

きっと神様なんてものがいたなら、俺達の一族を根絶やしにするつもりなのだろう。

だからこう思った。

世界は俺にやさしくない。

「なんだこれ!!??」

俺は駿河<sup>すまが</sup> 悠斗<sup>ゆうと</sup>。引条高校の三年生だ!!  
今現在、補習後の帰宅途中と言う状況なのだが………なんか変なもの  
が渦巻いている……。

普通のやつだったらここは全力ダッシュで逃亡に決まっている。  
でも、学校帰りの疲れた頭で思考回路がショートしている俺。

「おおすげえ!!何だこの謎物体!!」

なんか手なんか突っ込んでみちゃったりして、もうやりたい放題。

(見つけた!!)

「ん？」

ふと、渦の中から声が聞こえてきた。

「うおおおおお!!!!!!!!」

急に渦が俺の体を吸引しにかかる。

「おらあ!!!!」

ぎりぎり、近くの電柱に捕まる。

「やばいやばい!!!!」

吸引の勢いがどんどん強くなっている。

「飲まれてたまるかああああ!!!!!!!!」

全力で抵抗する俺。

バン!!

「ぐぶつつつ!!」

飛んできた何かが顔面に直撃。  
そのせいで手を離してしまった俺。

「うわあああああ!!!!!!!!!!」

俺は渦に飲み込まれた。

## クロウ国の姫

ゴスッ

「いっ〜っ……………」

すごい勢いで頭をぶつけてしまった。

周りを見渡すと床には魔方陣。真正面にはロープのようなものを被った人が一人。

その後ろに甲冑の鎧を着た騎士っぽいのが三人ほど控えている。

後ろの奴等の手に西洋剣が握られていたことに、俺の防衛本能が働いた。



「ぎゃあ……!!」

目の前のローブの奴を羽交い絞めにして、人質にする。

「動くなっ……!!」

飛び出そうとした後ろの奴らの動きが止まる。

「……あなたに……危害を加えるつもりは……ありませんから……」

どうか落ち着いて……ください……。」

人質に取った少女が苦しそうに言う。

「武装した奴らを並べといて、そんな言葉が信じられると思っか？」

武装している奴らに睨みをきかせておく。

「……あなた達……武器を捨てなさい……。」

「姫様!!!??何をおっしゃるのですか!!!??」

兵士の一人が叫ぶ。

「いいから……これは命令です。」

すると、全員武器を床に捨て始める。

「これで……こちらに敵意が……ないことが……お分かりいただけたでしょうか？」

少女がこちらを見る。

「分かった。ただしいくつか質問がある。

質問が終わるまで拘束は緩めない。それでいいか？」

「分かりました。」

話しやすいように、拘束を少し緩めてやる。

「まずここはどこだ？」

「クロウ国と言って、あなたが居たところはまた別の世界です。私があるをここに召喚しました。」

「何のために俺を召喚した？」

「魔王をあなたに倒してもらいたいからです。」

「は？」

「ちょっと待てよ、こんな感じの状況にありがちな言葉が聞こえ……」

「ですから、魔王をあなたに倒してもらいたいからです。」

「………なんてこつたい……。」

俺はよくあるファンタジーな世界に召喚されちゃったらしい……。

「大丈夫ですか？」

少女の言葉で我に返る。

「ああ、大丈夫だ……。」「

気を取り直して質問再開。

「俺がこの世界に来ることで、得ることの出来る力は？」

「なぜそんな質問をするのですか？」

少女は、なぜ何らかの能力が備わることについて知っているのか？  
と言った表情だ。

まあ、こつちの世界ではそういうのが定番なんだよね……。  
なんて言うわけにも行かず。

「何らかの能力が備わらなかつたら、召喚する意味なんてないだろ  
う？」

勇者になったやつが必ずしも武人なわけじゃない。だからなんら  
か能力が備わる。違うか？」

もっともらしいことを言っておく。

「よくわかりましたね。」

「こつちの世界に召喚された勇者様はかなり膨大な魔力を得ると聞いています。」

「なるほどね。」

「そりゃほしがるわけだ。」

「そういう話を聞いているってことは、前にもこつちに来た奴が居るってことだ。」

少女はビクンツと体を震わせる。

「……はい……。」

何か隠していたな……。

「じゃあ、そいつはどうなったんだ？」

少女が沈黙する。

この感じだとたぶん……。

「亡くなられました。」

「……やっぱり……」。

「……何時の事だ？」

「……三ヶ月ほど前のことです……」。

少女は俯いてしまった。

「はっ、何だ？ 始めの勇者が死んじゃったら、すぐ次の勇者に乗り換えるのか？」

少女が顔を上げる。

「あなたに私達の気持ちが分かりますか？」

こちらを睨む目には涙を浮かべている。

「魔王や魔物相手になすすべもなく虐げられる私達が……」

どうすることも出来ないからあなた達を戦場に送り出すことしか出来ない私達がー!!」

少女が感情をあらわにして叫ぶ。

近くに居る兵士達も悔しそうに拳を握り締めている。

.....ふざけるなよ?



「じゃあ、お前は俺達の気持ちが分かるのか？」

「えっ？」

思いがけない質問に啞然とする少女。

「いきなりわけの分からない所に連れて来られて、信頼できる人も今まで親しんできた人もいない。

そんな不安でいっぱいの中、いきなりいつ死ぬとも分からない戦場に駆り出され、働かされ、

拳句の果てに残虐に殺されたら？その魔王とやらのせいで死ぬより苦しい責苦を負う事になったら？

確かにお前は、勇者を召喚することに心を痛めてるかもしれない。だが本当に俺達の気持ちを理解しているのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

長い沈黙が訪れる。

「……………これが最後の質問だ。」

「……………なんでしょう?……………」

少女が顔を上げる。

「俺は元の世界に戻るのか?」

「一番気になっていた事だった。」

「…………魔王を倒してくださいれば、すぐにでも。」

「ずいぶん苦しそうな顔をしている。」

「それは、脅迫か?」

少女に対し微笑を向ける。

「違います。魔王は、この世界の人間が他の世界に逃げないよう  
にこの世界に結界を張りました。  
ですから、魔王を倒していただければ勇者様を元の世界に返すこ  
とができます。」

俺の目を見てはっきりと告げる。

「分かった。」

「では、この世界の勇者となってくれるのですか？」

「こっちを見る瞳には希望の光が灯っている。」

「そんなことは言っていない。」

「え？」

自分の希望を打ち砕かれたかのような表情だ。

「考えをまとめたい。少し時間をくれないか？」

「……分かりました……。」

少女は何か諦めたような表情していた。

## クロウ国の姫（後書き）

ほぼ会話だけになってしまいました・・・。

周りの状況を書き表せる文章力がほしいよう（TOT）

間違いあったので訂正しておきました・・・。

## 少女の覚悟（前書き）

前回投稿してから五分足らずで友人に間違いを指摘される気がた落ちしました・・・。

## 少女の覚悟

「サクラ＝オーファスト＝クロウ」

「それで、今回の勇者は使えそうか？」

私に問いかけてくるこの人物は、クロウ国現国王。  
つまり、私の父上です。

「はい。何か武術の心得があるようで、戦闘の素人ではないようです。」

あと、頭の回転がかなり良いようで、能力的にはかなり秀でたものをお持ちのようです。

ただ……。」

「なにかあったのか？」

私の浮かない顔を見て、心配そうに問いかける父上。

「それが……。」

召喚した際に人質にとられるという状況に陥ってしまったこと、向こうがこちらに対しあまり良い印象を持ってないことを話す。

「・・・そうか・・・。前勇者は、快く引き受けてくれたのだが・・・。  
それにしてもいきなりこちらの世界に連れてこられたのに、良く  
そこまでの反応が出来るものよ。」

質問してきた内容といい、かなり使えそうだな。」

「はい。」

「なんとなくでも、その者に勇者になってもわねばな・・・。この  
意味が分かるな？」

「・・・はい・・・。」

この意味とはつまり、あの人物に勇者になってもらうために全てを  
捧げるということ。  
全てを捧げるということとは、相手のどんな要望にも応えなければな  
らないと言っていること。



「辛いとは思うが……この国いや、この世界の為に必要なことなのだ……。すまん……。」

父上が頭を下げ始める。握り締めた拳は震えている。

誰だって自分の娘をどこの馬の骨とも知れない奴に好き勝手にさせることが耐えられるわけがない。

「頭をお上げ下さい父上!!そんなこと、召喚の儀を始める前から覚悟が決まっていることです!!」

辛かった。自分の父に頭を下げさせると言う状況が。

でも今はそれほどまでにひどい状況なのだ。

早くしないと、とり返しがつかなくなる。

だから、なりふり構ってられないのだ。

父上が顔を上げる。

「……では、頼んだぞ。……世界の命運はお前の肩にかかってお  
る……。」

そう行って父上が出て行く。足取りは重く、その背中が王の心境を  
物語っていた。

「……では……行きますか……。」

向かうは勇者様の部屋だ。

.....

. . . . .

「ユウト」

「あ〜〜やらかしたな〜」。

一人でじっくり考えたいと言ったら、この天蓋付のベットの  
ある部屋をあてがわれた。

ベッドに寝そべり、召喚の間での事を思い出す。

「いきなり、一国のお姫様を人質にとるとか、なにやってるんだ俺  
・・・。」

普通だったら、死刑にでもなっているだろう。

まさか、今頃どこかで俺の処罰の仕方でも決めているのではないだ  
ろつか？

そのために、姫様たちはどこかに行ったとか？

考えるだけでぞっとする。

「まあ、たぶん大丈夫だろう……。一応俺、勇者らしいし・  
」

そうして、先ほどやらかしてしまったことについて考えていた。

コンコン

「ん？」

誰だろう？さっきの姫様か？

そこで、さっきまで居た見張りの気配がなく、

ノックをしている人物の気配しかないことに気づく。

「なんなんだ？」

そう思いながらドアを開けると、そこにはさっきの姫様が立っていた。

「夜分遅くにすいません勇者様。少しお話があるのですが、よろしいでしょうか？」

自分に話しかけている姫様の様子が心なしか暗いような気がする。

「ああ、問題ないですよ。」

姫様を部屋の中に通す。

「で、話とは？」

早速たずねてきた内容について訊く。

まあたぶん、勇者をやってもらいたいとかそういう類の話だろう。

「この世界の勇者となってほしいという、願いを聞き入れていただけないでしょうか？」

「……ですよー……。」

「正直に言うつといやです。」

姫様が明らかに落胆した表情を見せる。

「……一応理由を聞かせていただけないでしょうか？」

姫様が尋ねる。

「んー、とりあえずはさっき言ったとおりのことなんですけどねー。  
あ、もちろんそれだけじゃないですよ？」

「では、他にどんな理由が？」

「んー……単刀直入に言っちゃつとですなえー。」

「はい。」

姫様がまっすぐにこっちを見る

「魔王を倒したら元の世界に戻るってのは嘘でしょう？」

姫様の顔が驚愕をあらわにする。

「・・・どうして・・・そんなこと?・・・」

なぜばれたのか分からないといった表情だ。

「おれ、嘘が分かるんですよ。ちょっと過去に色々ありましてネ・・・」

「・・・そうですか・・・」

最後に含みを入れたような感じでしゃべったことに何かを感じ取ったのか、

詳しくは追求してこなかった。

「俺は嘘つくような奴らには協力したくないし、  
それが、自分の人生を左右するものならなおさらね?」

きっぱりと、協力するつもりがないことを告げる。

「そうですか。．．．では．．．仕方ありませんね．．．。」

姫様が立ち上がる。

「実力行使でもする気ですか?

あなたに武術の嗜みがあるのは身のこなしで分かりますが、俺  
には勝てませんよ。」

おもわず身構える。

「．．．ちがいますよ．．．こじするんです．．．。」

いきなり姫様が服を脱ぎ始める。

「っっっちよっ!!何してるんですか!!!!」



予想だにしてなかった行動に動揺してしまう。

姫様は、服の中にいわゆるネグリジェというものを着ていた。

その姿は、姫様の可憐な容姿を一層際立たせ、すごいことになって  
いた。

すらつとした足に引き締まった体型、それでいて微妙にやわらかそ  
うな肌。

女神が光臨したといってもいい。それほどまでに美しい姿だった。

ただ一点を除いては……。

「私を好きにして下さい。どんなことをして下さいってもかまいません。  
ん。」

ですからどうかこの世界を救ってください。」

綺麗だ、確かに綺麗なのだが……その表情は苦痛に満ちている。

「ほんとにいいんだな？」

姫様の目をまっすぐに見つめる。

その目には苦悩がみられる。

「ええ。」

「俺結構ひどい奴だからね。痛いって叫んでもやめないと思うからよろしく。」

姫様を自分の方へ抱き寄せる。

「目瞑って。」

「つつつつつ！……！！……！！」

姫様の顔をまじまじと見る。

両目がつつく結ばれ、その端には涙が流れている。

「てごっつ。」

ズシシシ……！

「いたっ!」

姫様にデコピンを敢行する。

「何するんですか!」

おーおー、キレられるほど強くやった覚えはねえぞ?

「涙出てる。体震えてる。むっちゃ苦しそうな顔してる。」

そんな状況で、いやらしいことするほど俺は鬼畜じゃない。」

きっぱりと行ってやる。

「え?」

姫様がきよとんとする。

「何?そうまでして俺に勇者やらせたいわけ?

てか、絶対自分の意思じゃないだろ?」

「……ええ。」

でも、これはあなたがこちらに召喚される前から決まっていたことなんです。

召喚された勇者が協力を拒むようなことがあれば、  
どんな手を使ってでもその役目を遂行させる。と……。」

また姫様の表情が曇る。

「きまりごとねえ、そういうのは分かったけどさあ。

あんたはほんとにそれでいいのか？」

正直お偉いさんの考えはどうでもいい。

姫様の考えが訊きたい。

「いいわけないじゃないですか！！！！でも今は一刻を争うんです！！！！！」

それに、この国のみんなを救うには、あなたに勇者になってもらうほかないんですから！！！！！」

姫様は今まで溜め込んでいたのであろう言葉を、激情に任せて怒鳴る。

「よしよし。」

姫様の頭をなでる。

「え？」

今日二度目のポカンとした表情。

「ソレがあんたの本音だろ？ほんとはそんなことはしたくない。でもこの国は救いたい。とんだわがまま姫様だな？」

「だってあなたがそれでいいのか？なんて言うから……。」

姫様はばつが悪そうに下を向く。

「あんたみたいな地位だと、いろんなしがらみとかあって、さつきみたいに本音が言えないときとかもあるんだろっけどさ、俺は他人に嘘つかれんのか、建前でしゃべられんのが嫌いだから本音でしゃべってほしい。」

一拍置いてまたしゃべり始める。

「だから、俺になら何ぶちまけてもいいんだぜ？」

突如、姫様の目から涙があふれ出てくる。

「・・・怖かったです。知らない人とそんなことするなんて・・・  
誰にも弱音なんてはけなくて、ずっと辛かったです・・・。」

欲張りなわがまま姫様は俺の胸で泣いた。

## 少女の覚悟（後書き）

情景描写がうまく書けん・・・。  
どうしたらうまくなるのだろうか・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0300r/>

---

リリース

2011年3月10日01時34分発行